かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 56 号

昭和63年5月16日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　歯科口腔外科　島崎　善徳）　　カワセミ

Old MacDonald Had a Farm……亀下　勇… 2
随想‘15年を振り返って’……吉田晃敏… 3
新教授紹介
　久保教授の就任によせて……水戸廸郎… 4
　教授就任にあたって……久保良彦… 4
　岡田教授の就任によせて……原田一典… 5
　教授就任にあたって……岡田雅勝… 5
医師国家試験と交通事故……安孫子保… 6
研究室紹介（病理学第二講座）…… 6
第10回卒業証書授与式…… 7
学位記授与式…… 7
昭和63年度入学式…… 8
昭和63年度運営組織…… 9
昭和63年度の主な行事…… 9
昭和63年度新入生研修（第1回目）…… 9
課外活動用具の活用を!!…… 9
課外活動短信……10
窓　外……岡田雅勝…10

Old MacDonald Had a Farm

亀　下　　勇

旭川に来て、ちょうど5ヶ月になる。冬にむかいつつある10月にこの地に着いた時には、暖かい土地から来た私達が果たして無事春を迎えることが出来るのか、不安にさえなった。しかし、旭川の冬も過ぎてみれば、皆におどかされていたほどのものでもなかったような気がする。美しかった一面の銀世界も、いつの間にかドロまみれの雪に変わり、研究室の窓から見える景色にもなんとなく春の気配が感じられるようになった。

旭川に来る前の2年間、私は Los Angeles (LA) 郊外にある研究所に留学していた。私達が渡米した時、息子は2才半で娘は1才になったばかりであった。アメリカでの生活が少し落ち着いたところで、私達は彼らをアパートのすぐ近くの保育園に入れることにした。その保育園には日本人の子供はおらず、日本でちょうど言葉をよくしゃべり出した時期の2才の息子にとって、突然の環境の変化は、天地のひっくり返るような大事件であったにちがいない。「皆、何言うてるかさっぱりわからん。」と言いながら、息子が保育園から戻って来た時には、かわいそうな気もしたが、もう少し様子をみることにした。しばらくすると、子供達は保育園にも慣れ、英語らしい言葉も出はじめた。彼らが、まず覚えたのは、“No”と“Mine”と“More”である。これらの言葉は保育園での生存競争には必須のものらしく、アメリカ人の子供達も最初に覚えるものらしい。息子達が同年代の子供と遊び出すと、さらに言葉を覚えるのがはやくなった。1ヶ月ほどすると、子供達が家で、「オーメーダノヘダファー、イヤイヤヨー。」という歌を歌い出した。それが英語らしいことは、私にも見当がついたが、どんな意味なのか、さっぱりわからなかった。ずっと後になって、何かの機会に、子供達が歌っていたのが“Old MacDonald had a farm.”であることを知った。私達は、英語をずっと目から学んできたせいか、意外に簡単な文章でも耳から入ると全く意味がとれないことが多い。その歌をアメリカ人が歌うのを聞いてみると、それは確かに子供達が歌っていたとおり「オーメーダノヘダファー。」であった。子供達は、言葉をすべて耳から吸収し、それをそのまま繰り返し口から出すことによって言葉を学ぶため、帰国する頃にはすばらしい英語を話すようになり、日本人には不得手と言われる“L”と“R”を全く別の音として聞き、そして発音するようになっていた。

私は、アメリカで2年も生活すれば、さぞかし英語も上達することだろうと渡米前には考えていたが、なんのことはない。子供達の英語の上達に比べ、私の英語を話す力は行く前とあまり変わっていない。変わったことと言えば、細かい間違いを気にせず言葉を口に出せる図々しさが身についたくらいである。耳だけは慣れたせいか、アメリカ人どうしがスラングを交じえてしゃべっている時以外は、概ね聞き取れるようになった。

ＬＡには、英語を母国語としない様々な外国人が多数生活しているが、日本人の英語を話す力は、その中でもかなり低い方である。アメリカ人がびっくりするのは、英語を話せないと思っていた日本人が、驚くほどたくさんの単語を知っており、難かしい英語を読んだり書いたりすることである。しかし、残念なことに知っている単語を会話の中で使えないのも我々日本人の特徴であろう。アメリカ人の会話を聞いていると、たいして難かしい単語は出てこないのだが、日本では頭の柔軟な時期に読み書きばかりしているせいか、しゃべる方はなかなか思うようには上達しない。最初、私は英語を話す前に頭の中で文章をつくり、文法に誤まりがないかどうか確認してから口に出すようにしていた。この方法は、正確な文章を書く場合には大切であろうが、会話の場合には具合の悪いことに、文章が完成した時点では、もう話題は先に進んでいて、しばしば話すチャンスを逃がしてしまうことが多い。ＬＡに住むラテン系の人々の多くは英単語のスペルを正確に書けないし、また文法もほとんど知らない。彼らの英語をよく聞いていると、文章の現在形と過去形には無頓着で、3人称単数の動詞にｓをつけないなど、全くいい加減である。しかし、彼らは持ち前の楽天的な性格で文法の間違いなど全く気にせず、アメリカ人と対等にやり合っている。少なくとも日本人よりも、はるかにうまくコミュニケーションをしているように思える。文法や単語を正確に覚えたりするのも重要なことと思うが、言葉の本筋は話し相手に自分の意志を伝えることであることを我々は忘れがちである。

言葉の修得に限ったことではなく、新しいことを吸収するには、当然のことながら、ある程度若い人の方が有利である。しかし、4才と3才で帰国した私の子供達の場合は、若すぎたのか、英語を覚えるのもはやかったが、忘れるのもはやい。あれほど口から出ていた英語も、今ではほとんど話さなくなり、かわりに今度は耳から覚えた本場の北海道弁をしゃべっている。

（生化学第一講座　助教授）

随想‘15年を振り返って’

吉　田　晃　敏

旭川医科大学も早いもので創設以来15年を迎えようとしている。今回、光栄にも本学の広報誌である「かぐらおか」に投稿する機会を与えられた。本学の創設期に学生としてスタートし、その後も本学と共に歩んできた者の１人として、この15年を振り返って私なりの感想を述べてみたい。

私は、昭和48年11月に第１期生として本学に入学した。当時は国会において新設医大に関する法案の通過に時間がかかり、そのため本学は愛媛、山形大学両医学部と共に変則的な時期にその産声をあげた。当時、現在の校舎は神楽岡の地（現西神楽、旧名を神楽岡と称し、本広報誌の題名はこれに由来する）に建設中で、その周辺は雑草の生い茂った曠野であった。従って、我々１期生は、その数年後には積雪でつぶれてしまったという北門町の仮校舎（旧旭川教育大附属小学校）に通い、同年11月から翌年３月までの５カ月間に１年分の授業を濃縮して受けることとなった。極寒の冬、朝８時40分から夕方５時30分まで１日５講の授業が行われた。教養科目を担当下さった教官、学生そして事務職員が一体となって過ごした創設期の２、３のエピソードを以下に紹介し、当時の模様を回顧することにしたい。

11月という季節はずれに 100名もの学生が旭川を訪れたので、学生の住むべき下宿が足りなかった。当時の高木幸雄学生課長、石井紀夫教務係長らが入学式の前日まで、北門町近辺の民家を一軒一軒訪ね廻って下宿を募り旭川市民の御協力を頂いた話は、当時の我々をいたく感動させた。

入学後１カ月も経過すると、連日の濃縮授業のため疲労の色が濃くなった。そんな頃、当時の「三羊亭」で、大学が主催して、教官、学生、事務職員の約 150名が集まり、山田守英初代学長を囲んでの大コンパが行われた。また、正月には、三者が合同で百人一首大会を行った。これらは、私の記憶にあるほんの１コマのエピソードであるが、次の日への意欲が再燃したことを思い出す。このように本学の創設期においては教官、事務職員、学生が三位一体となって連帯し、このことがその後の本学の発展の基礎となったように思う。

さて、昭和49年５月からは、現在の地に完成した新しい校舎での学生生活が始まった。しかしながら、大学の周辺は依然として雑草の生い茂る曠野であった。附属病院の開院は昭和51年11月であったので、それまでの２年６カ月の期間、神楽岡に毎日通うのは本学の学生、教官、そして事務職員のみであった。教官、事務職員の中には単身赴任の方も多く、御不自由な生活を送られていたと聞く。

このような環境の中で、我々は引き続き教養科目および基礎医学の講義を受け、実習を行った。当時まだ少なかった教官スタッフの方々が講義・実習メニューを質・量ともに充実させるために、夜遅くまで懇切丁寧に我々をご指導くださったことを思い出す。今、学生から教官へと立場が変わった私には、ご指導下さった教官の皆様の熱意が初めて理解できるような気がして、改めて深謝する次第である。当時は実習で遅くなると帰りの交通手段がなく苦労したものだった。旭川駅前を発車して、ニュータウン入口（旧東神楽０号）とニュータウンガソリンスタンド前に止まる２系統のバスは、１時間に１～２本しかなく、夜８時以降は走らない。従って、クラスで自家用車を持っていた数人の学友は神様のように崇拝されたものだった。

さて、我々が臨床実習を開始した昭和52年は、附属病院の開院１年後にあたる。当時は、臨床系も教官スタッフが少なく、それが逆に幸いして各科の第一線の諸先生や教授から直接ご指導を頂く機会が多かった。今考えると、我々は非常に大切に扱われていたように思う。現在教官の立場にある私は、当時自分が受けた濃厚な教育を現在の学生諸君に行っているであろうかと反省させられる。

今基礎臨床棟の屋上に立ち、我母校旭川医科大学の周囲を一望すると、あまりの変貌に驚嘆する。学生にとっては、諸設備が完備し勉学の環境は完璧と言っていい。また、大学の内部では、事務系の機構も整い多くの優秀な事務スタッフが揃っている。さらに、過去にはその数が不足していた教官スタッフも質・量ともに充実してきている。一方、当時の学生は、今は次々と卒業し本年で同窓生は1,000名の大台を越えるに至った。 そしてその多くは北海道内を中心に広く全国に分布し、主に第一線の臨床医として各々の道で活躍している。また、創設期に我々旭川医大生を暖かく迎えて下さった旭川市民の健康管理にも寄与している。さらに、本学同窓生は、母校旭川医大のスタッフとしても定着しつつあり、昭和63年４月１日現在その助手以上のスタッフ 233名のうち、丁度 100名（43%）を占めるに至った。

振り返ってみると、今私は、創設当時我々学生のためにお骨折り頂いた第一線のスタッフとほぼ同じ年齢になっている事に気が付く。すなわち、スタッフが少ない中で、当時我々をご指導下さった諸先生方と同じ、あるいはそれ以上のことを後輩にしなければならない重責を感じている。15年たった今、旭川医科大学はもう新設医科大学ではないと言われる。今後円熟期を迎えるにあたって、創設期から引き継がれ、そしてこれにより今日まで幾多の困難な問題を乗り切ってきた、我旭川医科大学の教官、事務職員、学生の三位一体の協力を、いつまでも忘れずに心にとめて精進して行きたいと考えている。

（眼科学講座　助教授）

新　教　授　紹　介

4月1日付けで教授に就任された二人の先生について、身近な方からの紹介と、御本人からの挨拶を頂きました。

（学生課）

久保教授の就任によせて

外科学第二講座　教授　水戸廸郎

本年4月1日付で鮫島夏樹副学長の後任として外科学第一講座の第2代目教授に発令された久保良彦先生に、心からお祝い申し上げます。

北大医学部卒業の1年先輩として、また外科学を学ぶ同僚として、長い間直接そして間接に接してきた久保良彦先生のプロフィールを御紹介いたします。

久保先生は、昭和31年北大医学部を卒業後、胸部・血管外科を標榜する北大第二外科講座（当時奥田義正教授）の大学院生として入局し、昭和36年「実験的膵障害の肝に及ぼす影響」という表題で博士号を取得しましたが、その後大教室の中でも特に優秀な先輩・同僚が集る心血管外科部門の臨床、研究にめきめき頭角を表していきました。それをよく物語っているのは、その時の第二外科講座の教授で日本外科学会を主催した杉江三郎教授は、数人の先輩を差し置いてその抱擁力・指導力の才を買って医局長に登用し、さらに昭和48年鮫島教授の補佐役として旭川医大の助教授に抜擢されたことです。

昭和50年4月、私が第二外科教授として旭川に赴任してからは、約6ケ月間まだ現在の研究棟がなく旭川市立病院結核病棟の一室の時から、51年11月附属病院が開院して第一・第二外科の混合病棟の時代を通し、患者のことはもちろん両外科が協力していく体制を、久保先生といろいろな機会に相談して進めてきました。

久保先生の臨床面での高い評価は、その飾らない温厚な人格に源があると思います。手術は拡大、徹底的に行うが、私とは対象的に、それは gentle で meticulous であり、手術に求められる鬼手仏心を具現していると常日頃敬服しておりました。専門分野は心臓血管外科で、とくに冠動脈外科の Aortocoronary bypass は有名ですが、動脈瘤の外科、足の血行再建、さらに気管再建を伴う肺癌の外科も、我が国の第一人者として知られています。研究は、人工心臓、人工血管の材料の開発を主テーマにしてきました。

スポーツは野球、ゴルフ、山スキーと万能で、酒は静かにかなりの量をこなすことが知られています。

久保先生の紹介では、本当に欠点のないのが欠点ということでしょう。

最後に、大学は creative な仕事を世に問い続ける場であり、Paul Ehrlich の研究者として成功するに必要な4つの G, Glück, Geduld, Geld, Geschick に恵まれ、第一外科教室がますます隆盛になることを祈るとともに、同名講座である第二外科とそれぞれの分野で、独自かつ協調して、旭川医科大学の発展に寄与していきたいと念願しております。

教授就任にあたって

外科学第一講座　　久保　良彦

このたび外科学第一講座を担当することになりました。身に余る大任でありますが、全力投球で重責に当る所存でおります。何卒よろしくご支援、ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

この講座は初代の鮫島夏樹教授（現副学長、附属病院長）によって昭和48年11月に開かれ、以来消化器・一般外科、小児外科、胸部・心臓・血管外科といった広い領域にわたって教育・研究・診療が進められてきました。私はその講座開設時より助教授として共に仕事をして参りましたので、すでに14年余、いささかひねた新任教授であります。

この第一外科を継ぐことになりまして、初代の鮫島教授が築かれた業績をさらに発展させなければなりませんが、研究面では管腔外科学（耳馴れない言葉と思いますが、私達が日常おこなっている手術の大部分が管腔の処理であることを考えた私の造語です）における再建材料の生体適合、臓器保存、外科的腫瘍学関連問題などが引き続いて主要課題となります。申すまでもありませんが、外科は手術という極めて侵襲的治療手段を中心に患者の治療に参加する臨床医学の分野でありますので、できるだけ手術成績の向上につながるような研究に絞ってゆきたいと考えております。

臨床では外科研修の土台に血管外科をとり入れる方針でおります。これにはいつかの理由がありますが、主なものは次の二つです。その一つは外科医は血管の取扱いに馴れることが極めて大切と考えます。といいますのは外科手術の基本は血管の処理といっても過言でなく、大きな手術になるほどそれが手術の成否まで左右しかねないからです。いま一つは時代の流れが切除から再建外科、さらには移植の外科へと進みつつあります。血管外科に馴れ親しんでいれば、この流れにもスムーズに対応できると考えられます。幸い第一外科には全国的にその存在を認知されている血管外科の研究・診療グループがありますので、その実現は容易と思われ、成果を期待しております。

私は手術が好きで外科医になりました（というよりインターン時代手術を終えて先輩からご馳走される風呂上りのビールの味に囚われたという方が正しいかも知れません）。近頃医学は Science の方がやたら進歩・肥大化し、反面 Art の影が薄くなりつつあるようにみえます。その中で医者の手（技）が治療成績に直接関わることの多い外科はなお Art の部分が色濃く残されている領域といえます。それだけに原始的といえますが、反面人間的な温もりが感じられます。やりがいのある外科の道を選んだ幸運を噛みしめて参りましたが、これからはできるだけ多勢の仲間に加わってもらい、和気藹藹、実りの多い外科教室に発展させてゆきたいと念願しております。

岡田教授就任によせて

歴史教授　原田　一典

岡田先生は本学開設と同時に哲学担当の助教授として赴任され、このたび教授に昇任されました。改めて御紹介するまでもありませんが、編集委員会の要請にこたえて先生の一端を記させていただきます。

先生の研究対象は西洋哲学で、その関心は最初期のカントに始まり、英国経験論、プラグマティズムから、さらに論理学・言語論・現象学・科学論・倫理学などを通じての現代の分析哲学・解釈学に至る広範な分野に及んでおります。その研究業績は単著書３冊、共著書８冊、単著論文24篇と、その内容と共に、量的にも人文系の学界においては突出した成果を世に問うてこられました。中でも注目されているのはウィトゲンシュタインに関する研究です。ウィトゲンシュタインは現代哲学の中に全く新しい視野を開き、今日世界の哲学界において最も注目されている哲学者ですが、岡田先生は様様な角度から彼の思想の射程を測り、思想的基盤を精査すると共に、彼の全体像を初めて明らかにしました。この業績はウィトゲンシュタイン研究を一躍引上げるものとして非常に高い評価を得ております。またプラグマティズムの創始者であるパースに関しても、日本における数少ない研究者・紹介者として注目されております。

さらに先生は、医学と哲学との関係にも関心をもち、生命倫理の問題を含めて医療のあり方についての哲学的考察にも歩を進め、その成果を世に示すと共に、日本医学哲学・倫理学会の創設に尽力し、また他大学におけるこの種の研究・教育にも積極的に参加されています。

他方、若き日より詩作に励み、多くの同人誌等において、感性の高い詩や鋭い詩論を発表されています。

本学における先生は、本来の哲学の他に、ドイツ語・論理学を担当し、さらに社会系総合講義ならびに医学概論をも分担されています。また志ある学生の求めに心よく応じられて、毎年数種の哲学・文学に関する研究会・読書会を本学創設以来継続して主宰し、大きな糧として学生を育んでおられます。

温厚誠実、控え目ではにかみやで、時に諧謔を好む人柄と（ただしビールを飲んでの論争では、徹底的に相手をやりこめてやまないということを含めて）、また、その勉学に対する厳しい姿勢は、何時も親和感と緊張感を与えて下さり、先生は周囲の私達にとって大きな存在なのであります。

教授就任にあたって

哲　学　　岡田　雅勝

新しく入学生を迎えるごとに自分と年齢の差を感じさせられています。開学と同時に旭川医科大学に務めた頃は、そればど年の開きを感じませんでしたが、最近は自分の子供が入学したような開きを感じます。私が在職してから15年になり、その間、いろいろな変化はありましたが、学生との交わりを楽しみにして学園生活をしてきました。これからもそうしたいと思っています。その気持ちを〈青春〉という言葉に託して、ここで〈青春〉について少しばかり触れて、〈哲学〉の勧めを致したいと思います。

世代によって人によってそれぞれに相応しい青春があり、その青春はその人固有のもので、誰にもとって代わることのできないものです。ですから、自分の青春を規準にして、何かを言うつもりはありません。ただ、青春は大変貴重で、身体的にも精神的にも最も躍動するときで、その貴重な青春に自らのうちにあるいろいろ可能性を追求し開拓することを提言したいのです。

私が携わっております〈哲学〉は、知識の在り方や真理の何かへの問いを問い続けることにあるとされていますが、哲学は、またつねに生き方に密接に関わっています。その意味で哲学的思索には過去の体験が重くのしかかっております。言い換えれば、哲学は自分の体験された生を追憶することに根差されています。哲学の真理の探究には客観的なものが目指されていますが、同時にまた個人的な生の体験に深く関わっています。

この体験が深く豊かであれば、それだけ一層哲学的思索を深め普遍的なものにしていくのだと思われます。青春の体験がなかでも最も貴重であり、その人の一生を導くほど重要なものと思われます。ですから学生のみなさんには青春時代に恐れることなく、冒険を求め、生の深みを体験していただきたいと思うのです。そして知識や技術は究極のところ生の深みや豊かさの体験に支えられているのだということを本当に分かってもらいたいのです。私たちはともすれば目先の良さや快楽にのみ目を向け勝ちですが、自分の生にとって最も肝要だと思われることに青春の情熱をたぎらせることにこそ真に生の意味が見い出されるのに違いありません。

青春のアヴァンチュールこそ哲学することだと思われます。哲学することは、何も哲学書を紐解くばかりにあるのではなく、何からでも何処からでも始めることができます。一番問題なのは生に対する姿勢です。謎多い生に立ち向かい、よりよい生の価値を得ようという姿勢があれば、それで全てです。そうすれば、きっとこれまでとは違った視野を持つに違いありません。〈青春〉をこうした哲学的思索に委ねてみませんか。〈哲学〉の勧めを私の教授就任の挨拶といたしたいと思います。

医師国家試験と交通事故

副学長　安孫子　保

新入生諸君、入学おめでとうございます。父兄の方もさぞかし喜んでおられることでしょう。苦しかった受験生活から解放されて、医学の道に入ることが出来たのです。気候も良くなるし、まず運転免許を取ってドライブをしてみたいと考えるのは無理からぬことです。父兄の方も、安い入学料と安い授業料の国立大学に入ってくれたのだから、中古車の一台ぐらい買ってやってもよいとお考えかも知れません。しかし、交通事故の問題、駐車場の管理運営上の問題などのため、本学では新入生の自動車通学を禁止しています。従って、父兄の方には学生に車を買ってやらないようにという通知が大学から行っている筈です。

車を運転すれば事故はつきものです。人の命を救う立場にある医師の卵が、人を傷つけたり人の命を奪ったりすれば、そのような人には医師免許証を与えないで欲しいという声が出てくるのは当然です。このため、医師国家試験を受ける時（願書を出す時）には、罰金以上の刑に処せられたことのある人は申し出るように定められています。

罰金以上の刑に処せられた人にも、救済の道が残されています。罰金以上の刑に処せられたことがあっても、学長に本人を弁護する文章、つまり『申立書』を書いていただければ、医師国家試験を受けて医師になることが可能です。でも、学長はすぐそのような申立書を書いてくれるのでしょうか。勿論、改悛の情がない者には書くわけがありません。また、悪質な事故であれば、この場合にも書くことが出来ないでしょう。

残念なことに、本学の学生がおこした事件・事故は年々増えています。ですから、このおめでたい時に学生諸君に注意しなければならないのです。本人がいくら注意していても、事故をおこしてしまうこともあります。でも、恐ろしくなって事故現場から逃げたりしないでください。事故が発生したことを、早く警察に届けてください。逃げれば逃げるほど罰は大きくなり、学長は申立書を書くことが出来なくなります。

不幸にして、事件・事故が起こったら、そのことを早く学年担当の先生にも報告して下さい。この報告は大変重要です。なぜなら、この報告こそが、学長の申立書発行につながる唯一の道だからです。ただし、学長の申立書があっても、罰金以上の刑に処せられた人は医師国家試験の時には不利になりますので、とにかく、事件・事故をおこさないよう常に気をつけて下さい。

研　究　室　紹　介

■　病理学第二講座　■　　片桐　一

8年前に初代板倉克明教授のあとを継いだ片桐教授は、免疫遺伝学、特にＨＬＡ抗原系の免疫化学的解析に重点を置き研究を進めている。これまでの大学院卒業生には、丹野（2期：順天堂大病理助手）、楯（3期：ニューヨーク大学留学中）、小端（4期：順天堂大免疫助手）が、また第2病理で研讃を積んだ本学の臨床医には、東（1期：ダートマス大学留学後、小児科助手）、平田（2期：1外助手）、古井（2期：UCLA留学中、2外助手）、熊井（3期：耳鼻科助手）、長谷川（3期：小児科）、中村（4期：NIH留学中）、片山（4期：整形外科）、井上（5期：婦人科）らがおり、それぞれの分野で活躍している。ここで現在の教室のメンバーを紹介したい。

助教授の矢倉は、リンパ球分化の機構をテーマに解析を進めており、教育、臨床病理、若手の育成と多忙のうちにも世界的に注目を集める成果を発表している。助手の三代川（3期）は、3年間のミネソタ大学での留学を終え、4月から教室に新風を吹込むことが期待される。同じく助手の河端（5期）は、マウスのＢ細胞分化を制御している分子の精製を中心に研究を進めている。次いで、この3月に医学博士となった3人のうち、村上（3期）は、ＨＬＡ－ＤＰ抗原を生化学的手法を用いて解析し、その多型性の由来の一端を解明した。4月からは古巣の3内に戻り、今までの成果を生かした研究を進めることが期待される。坂田（4期）は、4年に及ぶ研究からＨＬＡ領域にある新たな抗原を見出した。5月からは2外で移植免疫の仕事を進めるものと思われる。また、3内出身の芦田（5期）は、Ｂ細胞活性化に関与している分子の構造に関する新知見を得ると同時に、第2病理で出会った女性を一生の伴侶とすることに成功した。次に、来年の博士号獲得をめざし、昼夜を分かたぬ実験に打込んでいるのが、3内出身の綾部（6期）と皮膚科出身の高橋（7期）である。高橋は免疫応答に関与しているＨＬＡの遺伝子解析に、また綾部はモノクローナル抗体を用いたＨＬＡ抗原系の解析に余念がない。高橋はこれ以上痩せられないが、綾部は既に5kgは痩せ、トレードマークとなった彼の歌声も最近は聞く機会がめっきり減ってしまった。昨年4月から加わった歯科口腔外科の久保（新潟大昭和61年卒）は、現在高橋について基礎を学んでいる。また、自衛隊病院から尾立（防衛医大昭和60年卒）が週に数日顔を出しているが、新年度からはfull time で参加することになり、新たに加わる大学院生3人とともにその力を爆発すべく準備中である。最後に教室の紅一点村田さんは、持ち前のエネルギーで動物の維持、実験器具の整備、病理組織標本作製、さらに事務と、いずれの仕事も華麗にさばいている。免疫学、免疫遺伝学を中心とした研究は、今後も医学の重要な位置を占め続けると思われる。教室員一同、この分野に足跡を残すべく日々努力している。

（病理学第二講座　教授）

第10回卒業証書授与式

第10回卒業生 110名（うち女子12名）への卒業証書授与式が、3月25日（金）10時30分から本学体育館において挙行された。

式では、室内合奏団が奏でる調でのなか、学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が手渡された。

ついで学長から「医師は病気を制御するに留まらず、病める“人”を癒やす事を使命としています。従って医師には、人間に対する愛と深い洞察が要求されます。この点に関しては、卒業証書も可能性を認定したに過ぎないと言わざるを得ません。是非この可能性を各人の努力で発展させ、現実のものとして戴かねばなりません。」と門出にあたり告辞が述べられた。

（学生課）

学位記授与式

3月25日（金）9時30分から、本学第2会議室において、大学院医学研究科を修了した10名に医学博士の学位が授与された。

10名の氏名・専攻・学位論文題目は次のとおりです。

（学生課）

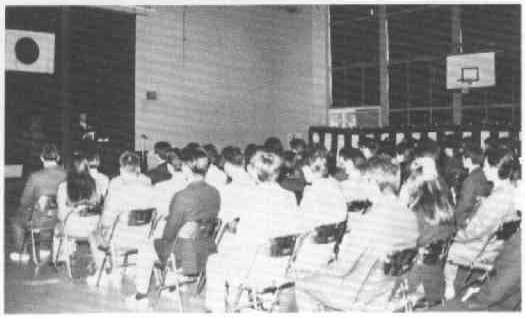
氏　名	専　　攻	学位論文題目
小原充裕	生体情報調節系 代謝・内分泌学部門	Conformational Changes in the Vicinity of the N-Iodoacetyl-N′-(5-sulfo-1-naphthyl) ethylenediamine Attached to the Specific Thiol of Sarcoplasmic Reticulum Ca^{2+}-ATPase throughout the Catalytic Cycle. （筋小胞体Ca^{2+}ATPaseの特異的SH基に結合したN-Iodoacetyl-N′-(5-sulfo-1-naphthyl)ethylenediamine近傍における触媒サイクルを通しての構造変化）
紀野修一	生体情報調節系 代謝・内分泌学部門	肝部分切除後の肝実質細胞の増殖に及ぼす副交感神経性因子の役割
奥村利勝	生体情報調節系 情動科学部門	胃を支配する副交感神経系の構築とそれらの胃潰瘍形成に対する意義
髙草木薫	生体情報調節系 神経科学部門	Single medullary reticulospinal neurons exert postsynaptic inhibitory effects upon multiple alpha-motoneurons innervating cat hindlimb muscles. （姿勢筋の筋トーヌス制御に関与する脳幹脊髄神経機構の解析—筋トーヌス抑制の実行系の同定—）
松山清治	生体情報調節系 神経科学部門	Ascending and descending projections of the nucleus reticularis gigantocellularis in the cat demonstrated by the anterograde neural tracer, Phaseolns vulgaris Leucoagglutinin (PHA-L). （延髄巨大細胞性網様核の上行性および下行性軸索投射様式のPHA-L法による解析）
坂田博美	生体情報調節系 代謝・内分泌学部門	DR5ホモ接合体B細胞株JMeのクラスⅡ抗原分子の解析—新しいクラスⅡ抗原分子を検出する可能性—
蘆田知史	生体情報調節系 情動科学部門	マウスリンパ球表面抗原 Lyb—2 分子の機能および構造の解析
辻　忠克	生体情報調節系 循環呼吸動態学部門	光線力学的治療の人癌培養細胞の細胞回転に及ぼす影響—その殺細胞効果に関連して—
井上亮一	細胞・器官系 発生学部門	単クローン抗体により検出される絨毛癌関連抗原のヒト癌組織における発現の解析
西川祐司	細胞・器官系 腫瘍学部門	Morphological Studies on Cerebral Cortical Lesions Induced by Transient Ischemia in Mongolian Gerbil-Diffuse perikaryal clearing and peripheral perikaryal clearing （一過性虚血によるスナネズミ大脳皮質病変の形態学的研究—神経細胞のびまん性淡明化と周辺性淡明化）

昭和63年度入学式

昭和63年度入学式が、4月8日（金）10時から本学体育館において挙行された。

式では、新入生 120名（うち女子学生34名）を代表して青木直子さんが宣誓。ついで、学長式辞（学長入院加療中のため安孫子副学長代読）があり、新入生は医学生としての自覚を新たに、大学生活の一歩を踏み出した。

（学生課）



昭和63年度入学者

昭和63年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会は各々11名の委員で構成され、委員長には教育研究及び厚生補導担当の副学長が充てられています。

両委員会の昭和63年度委員は次のとおりです。

〈教務委員会〉

委員長　安孫子　保（副学長）
副委員長　笹森秀雄（図書館長）
委員　原田一典　福山裕三
安田博　宮岸勉
谷本光穂　竹光義治
金沢徹　八竹直
山村晃太郎

〈厚生補導委員会〉

委員長　安孫子　保（副学長）
副委員長　内田倖喜
委員　岡田雅勝　飯塚一
上口勇次郎　清水哲也
松嶋少二　高杉佑一
東匡伸　酒木保
宮本健司

（学生課）

昭和63年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

4月8日	入学式
4月18日～19日	新入生研修（第1回目）
6月16日～19日	医大祭
9月7日	体育大会
9月21日	解剖体慰霊式
10月27日～28日 10月31日～11月1日	新入生研修（第2回目）
11月5日	本学記念日
3月25日	卒業式

（学生課）

昭和63和度新入生研修（第1回目）

昭和63年度新入生研修（第1回目）が、4月18日(月)・19日(火)の両日開催されました。

第1日目はA組、第2日目はB組を対象に実施されました。研修は新入生を15名程のグループに分け、1グループに一般教育の教官1名と基礎又は臨床の教授1名の計2名があたり、自己紹介についで勉学上の問題あるいは学生生活全般について指導助言あるいは懇談が行われました。

（学生課）

課外活動用具の活用を!!

本学では、学生諸君がより一層充実した大学生活を過す援助のために、課外活動用具を用意しています。

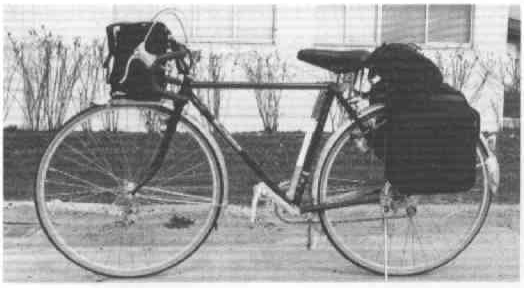
その主な物品は、ソフトボール用具一式、テニスラケット（硬式・軟式）、バドミントンラケット、キャンプ用具（シュラフ、テント、コンロ、コッヘル等）、サイクリング車です。

特にこのサイクリング車は、今年10台購入したもので、休日のサイクリングはもとより、夏休みには自転車旅行も可能です（バッグも装備）。

以上、主な課外活動用具を紹介しましたが、詳しくは「学生生活のしおり」50ページを見るか、学生係に尋ねてください。

また、物品の借用にあたっては、「課外活動用具貸出要項」を遵守し、みんなが楽しく使用できるように各自が注意してください。

（学生課）



課外活動短信

第30回東日本医科学生総合体育大会（冬季スキー部門）

3/20～3/23　野沢温泉スキー場

〈男子〉　滑　降　2位：横山　和典（6年）

15kmXC　1位：大久保又一（6年）

8kmXC　1位：大久保又一（6年）

リレー　2位：加藤、大方、大久保、久保

総　合　2位

〈女子〉　大回転　1位：山上　和江（4年）

回　転　2位：永田　昭子（5年）

5kmXC　1位：関　圭子（5年）

3位：谷　隆子（6年）

3kmXC　2位：谷　隆子（6年）

3位：関　圭子（5年）

総　合　1位

ワープロのこと

かつて苦労して懸命になって原稿を手書きで清書したことが懐かしいほど、今はすっかりワープロにすがりついて原稿を書いている。私の使っているワープロは旧式であるが、それでも貴重だ。私にとって欠かすことのできない，最も良き助け手であり、記憶の衰えをカバーしてくれる知識の守衛者でもある。

覚え立ての頃は大変だった。パソコンの和文ソフトを使い、マニュアルを傍らに置きながら、懸命に操作を覚えたことが思い出される。誰でも出来そうな簡単な操作が出来なかった。文字を打つにしても文字盤の何処に、〈あいうえお・・・〉の文字があるのか探すに時間がかかった。〈あ、あ、あ、・・・〉と言いながら、文字盤に語を探し求め、そしてやっとの思いで、ある程度の文章を打ちあげた。それから今度は印刷にしようとしてもうまくいかない。あちこちと機械をいじくっているうちに、長時間かけて打ち上げた文章を全て消してしまったことなど、失敗談にはことかかなかった。

最もひどいことは、あまりにも熱中してデイスプレイをみつめ、文字盤をみつめたものだから、目はすっかり充血し、肩がぱんぱんに凝ってしまったことだ。普段手書きの原稿では、一日に10時間以上書いても指が痛いとか手がだるくなるなどの兆候しかなかったのだったがワープロでは、すっかり目にきてしまった。目を保護すべく、次に取った策は、出来るだけデスプレイをみないで打つという方法だった。しかし今度は、漢字に転換するさいに、同じ仮名表示が別な言葉になってしまうという失態を重ねた。例えば〈しかい〉という仮名表示から〈視界〉という漢字を表示しようとして、漢字転換の所を打つのだが、〈視界〉という漢字ではなく、〈司会〉〈歯科医〉〈死海〉〈死かい〉など他の言葉を打ってしまう。後で自分が意図としていた文字が何であったか、考えてしまうような苦々しい思いは尽きない。

笹森先生を始めとして、身近な先生方々の暖かい配慮によって、その後専用のワープロを手にすることができた。ワープロも一年ぐらい続ければ、どうやら苦労しなくっても打てるようになった。それ以来講義ノートも、論文作成も、手紙もワープロで打っている。ワープロで最も便利さを感じているのは〈翻訳〉の場合である。何の原稿も手直しが多いものだが、〈翻訳〉は特に手直しが多い。ワープロは書き直しをするという無駄を省いてくれる。お陰でワープロの使用によって〈翻訳〉は、これまでとは比べものにならないほどはかどっている。

自分がよいと思うものを人に勧めるのは、人間のごく普通の性であろう。まわりの人たちにワープロの勧めを機会ある度にしているが、何人かの人々は依然として手書きの原稿を誇りにしており、私の勧めに耳をかさない。それどころか、ワープロの欠点を指摘し、手書きの良さを強調する。私はそうした人たちのワープロの持つ欠点の指摘は当てはまらないと考えるが、しかし手書きの原稿を書き続けている人々を大変うらやましく思っている。それらの人たちは大抵達筆な方であるし、手書きをとおして原稿に自分の作品を作っておられる方で、何とも言えない風格がある方であるからである。ある出版社のヴェテランの編集者が、〈矢張り、原稿は手書きですよ〉と言っていた。そうなのかも知れない。しかし私にとってワープロは欠かすことができない伴侶となってしまった。

（哲　学　教授）